

現代名作集

(上)

現代名作集

(上)

新潮社版



日本文学全集 49

現代名作集(上)

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代)振替東京 808 郵便番号 162

印刷所／塚田印刷株式会社 製本所／神田加藤製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

青	草（十一谷義三郎）	七
淫	売 婦（葉山 嘉樹）	二七
渦	巻ける鳥の群（黒島 伝治）	三五
鳥	羽家の子供（田畑修一郎）	五九
鬼	涙 村（牧野 信一）	八七
い	のちの初夜（北条 民雄）	一〇五

櫻の芽立(橋本英吉)

一三

鶯
(伊藤永之介)

一六

オリンポスの果実(田中英光)

一五

献
身(北原武夫)

二八

遠方の人(森山啓)

三〇

赤
蛙(島木健作)

三五

受
胎(井上友一郎)

三三

金の
棺(網野菊)

三七

終りの火(檀 一雄) 四二

夢幻泡影(外村 繁) 四三

天皇の帽子(今日出海) 四六

鳳仙花(川崎長太郎) 四七

耳学問(木山捷平) 四九

おはん(宇野千代) 五〇

注	年	解
解	譜	説
五三	五七	五九

河盛好蔵

現代名作集
(上)

青 草

十一谷義三郎

一

杉兄弟は支配人の娘の歌津子と殆ど同じ一つの揺籃の中で育った。彼等が歌津子の母親の乳房を見て甘い微な戦慄を覚えたこともある。歌津子が彼等の父の大きな手で真紅な帽子を被せられて、誇らしさとよろこびに夢中になったこともある。それから、細い糸糸が、彼等三人の手から手へ、唄に合せて、幾度、美しい幻影を織ったことだろう。弟の手がそつとうしろから彼女の清い眉の上を蔽うたこともある。兄が胸を持って彼女のからだを色紙の風車を回すように、日なたできり／＼と振り回したこともある。

そうして、ある日、彼等の明るい淀みのない夢の世に、決定的な出来事が起ったのであった。

その日、弟が鬼にあたつて、兄と彼女とが手を携えて逃げた、弟は納屋の陰に退いて、その板塀に凭れながら、蒼く澄んだ空へ抜けるほどの声で一から五十まで数を算え初めた。その間に小さな駆落者等は、大忙しで裏庭の雑草を踏み越えて、そこに立っている無花果の樹に攀じ登った。

五十が切れると鬼が納屋の陰から駆け出して来た。彼は微風に光り動いている雑草の上に眼をやつて、暫くぼんやりと立ちつくしていた。

ふと青い無花果が飛んで来て彼の足もとに落ちた。彼が見上げると、向うの樹の上からどつと歓声が上がった。兄と彼女と同じ枝に止つて、真白な口ばたに無花果の実の汁をつけて、笑っているのだった。弟はその下へ駆けよつた。

「おいで。無花果進上。」と兄が言った。

「そうよ。無花果進上。」と彼女も言った。

弟は樹の幹に手をかけて振り仰いで、彼等を睨まえた。その時、弟は兄の頬に、何かが止まっているのに気がついた。葉越しの太陽の光りが、彼等の白い皮膚の上に、もろ／＼とした斑点を写しているので見分け難

いが、じいっと眸を凝らすと、大きな蜘蛛が、脚を一
杯に伸して、奇怪な文身か何かのように、兄の頬にへ
ぱりついてるではないか。弟は二三歩あとへよって、
無言のまゝ蒼くなつて兄の顔を指した。

「あら、あら、あら」そう叫びながら、彼女は樹の幹
に震えついた。異常な神経家の蜘蛛はたゞならぬ雰囲
気を感じたのだらう。兄の頬から細い首筋の方へ動き
初めた。兄が何気なくそこへ手をやると、蜘蛛は今度
はその手の甲の上に蟠まつて、腹を動かした。兄は忙
ててもう一方の手でそれを払った。そうしてその瞬間
に彼のからだは中心を失つて地上に落ちた。

彼女と弟とは固くなつて眸を見張つた。兄は俯伏せ
に横わつたまゝ片方の眼を押えてしく／＼泣いてい
た。その指の叉から濃い血が滲み出て来る。そして、
彼の頭の上の空間には、脚を縮めた醜い蜘蛛のからだ
が、上の樹の枝の揺れにつれてもぞ／＼と動いている
のだ。

急に彼女が、樹の上で破れるように泣きだした。弟
もぼろ／＼と涙を流した。そして主屋の方へ一散に駆
けながら、遠くの彼女と声を合せて泣いていった。

兄の左の眼はその時以来ずっと黒眼鏡で蔽われてい
る。

二

蜻蛉釣りに蜻蛉の行衛をもとめたり、紙鳶上げに紙
鳶のありかを探したりする煩しさに兄は耐えられなく
なつてしまつた。そうして雑草を踏みしだいて駆け回
つたり、ゴム毬をはる／＼と投げ上げたりする輝かし
い遊びからも彼はすっかり遠ざかつてしまつた。彼は
肥つて色が白かつた、それが黒眼鏡を掛けだしてか
ら、一層静な清浄な感じのする子供になつた。彼を憫
しむ言葉が、弟等の前で、屡々周囲の人々の口に上つ
た。歌津子が細々とした毛糸細工を贈つたり、小さな
南京玉の飾りを兄の胸へつけてやったりすることも度
度あつた。

弟は勝気な健康な子供であつた。それが、いつの間
にか何かしら憂鬱を感じるようになった。

ある晩、村の社の祭礼で、兄を真中に、歌津子と弟
とが両側に並んでお参りをした。帰りは、紙鉄砲や折

紙細工の批評や、焰の上に手を翳して平気でいた魔術師の噂などで、彼等は夫々興奮していた。

人通りの少いところへ来ると、兄は先きにたつてビイビイと口笛を鳴らした。弟は大声で軍歌を唄った。

歌津子は空を仰いだり彼等の歌に耳を澄して微笑んだり、今買った京人形を愛しんだりして歩いていった。

暫くゆくと、彼女がふいと兄のからだに抱きついて彼を引き戻した。闇がりから大きな馬の顔が現れた。

「ちっとも見えないんだ。」と兄が言った。彼女はしっかりと兄の手を握って息を喘ませた。

それを見ると弟は急に口を緘んで、彼女を放つておいてどん／＼先へいった。弟の胸の中に不満と淋しさが膨れ上つていったのだ。

その夜、床に這入ってから、弟は夜着の中でいつまでも眼を睜っていた。そして彼は、隣りに眠っている兄の穏かな寝息きを聞くと、こっそり起き上つて、枕もとの兄の黒眼鏡を持って縁側に出た。そして、厠の側の雨戸を開けて、星の輝いてる空に向つて、力限り抛り上げた。それから床に戻つて、いつか教会で聞いた神様の名を幾度も口の中で繰り返した。いつの間

にか涙が眼に一杯に溢れた。そうして臉を合せると、自分が歌津子と肩を組みながら、兄が馬に喰われているのを眺めている夢を見た。

中学校へ通うようになると兄は一層無口になった。

兄の穿く靴を弟は嘆美に似た心持ちで眺めた。それから、兄がリーダの復習をしているのを傍で聞いていると、急に、兄が、どんなに踏み台をしても届かないようなどころへ昇天してしまつたような気がするのだつた。

ある日、弟は兄の友人からこんなことを聞いた。その日、兄の組は体操の時間に高い梁木の上を渡らされた。兄は、教師の止めるのを聞かないで、皆と同じように渡ろうとした。そうして、半ばまで来ると、不意によろめいて、く／＼り猿のように梁木にしがみついた。一体、片方の眼を失つた彼が、直線の上を真直に歩こうとするのが無理なのだ。兄はそこから吊さがつてゐる長い棒を伝つて一旦下へ降りて来た。教師は苦笑しながら、それ見ろと言つた。

皆が渡り切ると、兄は一度片方の梯子を登り初め

た。教師は赧はにかくなつて兄を叱しかつた。兄は微笑しながら、大丈夫ですと言つた。そして登つていった。

三分の一ほど行くと、彼はまた重心を失つて、危あやく腹はら這はいになつた。下から仰あぎ見てゐる教師も生徒も愕おどろ然ぜんとして顔色を変えた。「下りろ、下りろ。」と教師が申高かんだかに言つた。兄はそれには構わずにも一度梁木の上かみぎに立ち上つた。そして今度は五寸位ごすんずつ小刻みに丹念に歩いていった。下の人達は笑いながら蒼蒼くなつてそれを看守くわんしゆつた。

兄が渡り切つて下りて来ると、教師が「馬鹿」と言つた。そして兄は残りの時間中、梁木の下に立たされたのだという。

兄は一言もそれを家の者に話さなかつた。弟は兄にある懼おそれをさえ抱き初めた。

弟は歌津子と一緒に小学校に通つていた。雨の日は同じ傘で帰つたり、お天気には月見草や手鎖*りやや草笛に誘よわれて一緒に道草を食つたり、それから勿論もちろん意地の悪い友達の冷評と楽書きの的となつたりしつゝ、彼等は毎日愉快であつた。

彼女も兄に対してはもうある距離を感じていた。そうして学校から帰つて来て、復習をして貰うために、弟と共に兄の机の前に坐る時にも、ともすると救いを求めるように弟の方へ微笑ほくそみかけて、兄に向つては、以前ほどはつきりと口を利かなくなつてしまつた。

三

杉家は酒の醸造を業としていた。住居すまいから五町ほどいった浜辺に酒倉がある。小学校を出ると、弟は、父の意志で、それへ毎日やらされることとなつた。彼はそこで新しい酒樽の木の香を嗅かいだり、禪ぜんどし一つで、火の入つた酒の焚き出しを手伝つたりした。彼の肉体にはぐんぐん力が這入つて来た。そして真白なその肌は、そこに働いてゐる男達の評判になつた。

歌津子は県立の女学校へ通つていた。学校でやつた縫物を持つて来たり、リードを抱えて兄の部屋へ這入つてゆくことが度々あつた。弟は時折り彼等の会話を耳を澄すました。それから探るように彼女の眼を見た。彼女の物を言う時の口つきとか柔かい膨ふくららみを示した手とか、彼女から発するあらゆる微細な表情がいちい

ち彼を懼れしめるようになった。彼はこつそりと教会へ通った。

ある夏の夕方、三人はテンマに乗って海へ出た。弟が櫂を握っていた。兄と彼女とが並んで彼の方を向いて掛けていた。鰯の鳴る音と胴が波を囁む音とに遮られて、彼等の会話は弟の耳へは達しなかった。然し弟は、白暮の冷い光りの中に浮び出ている一つの顔に、じいっと神経をたてた。

「辺りに舟は一艘もいなかった。弟は裸になった。

「何処まで出るの？」と彼女が訊いた。それには答えないで、弟は力限り漕いだ。彼の肩から二の腕へかけて真白な肉瘤が盛り上りその上に汗がいちめんに滲んでいた。舟は彼のからだと共に劇しく揺れ、空には星が輝き、そうして彼等は涯しの無い淋しさの中へ出ていった。

彼女は片手を兄の膝に載せ、片手でしっかりと舟縁を掴んでいた。風に乱された彼女の髪が、兄の没表情な頬の上に散りかゝってゆく。

「いやだ、いやだ。」そう言って彼女は身を震わせた。

「寂しいの。馬鹿だなあ。」そして兄は微笑んだ。

弟は鰯を止めて舟を流した。彼の大きな胸は彼等の方に向いて緩く波打っていた。

「疲れたろう。」と兄が言った。

「なあに。いけるところまでいくと面白いんだ。」

「そうだね。」

もうすっかり闇くなっていた。近くの海面からイナの跳ねる音がひびいて来た。そして水の中を白坊主のような水母が幾つも浮いて通った。彼女は辺りを見回した。

「もし舟が覆ったらどうしようかしら。」

それを聞くと弟は大声で笑った。それから彼は言った。

「舟を漕ぎながら、ふいと気が違ってしまうと愉快だと思うがな。」

今度は兄が声高に笑った。

「結局どうなるんだろう。」

「誰が？」

「誰って？」

「結局死ぬんさ。」

「結局死ぬんだろうなあ。」

「死ぬから詰らないさ。」

そう言つて兄は空を仰ぎ見た。そして彼女を顧み

た。

「見える？」

「なあに？」

「星さ。」

「あんなに光ってる。」

「聞いて。北斗星は何処？」

彼女は手を挙げた。兄は黒眼鏡のかゝつた顔をひた

りとそれに寄せた。

弟は襷を握つて立ち上つた。舟ががぶりと揺れた。
「寒い、わたし。」そして彼女は坐り直した。弟は彼女
の膝へ彼の浴衣を放り掛けた。それから又沖へ漕ぎ
初めた。彼女は劇しくかぶりを振つた。

「もう帰るんだ。」と兄が命令するように言つた。弟
は聞かずに漕いだ。舟は氣違いのように暴れ進む。彼
女は真蒼になつて兄に抱きついた。兄はじつと弟を見
据えて唇を噛んだ。

弟は眼の前の空を見た。空の星が自分の汗の中へ溶
け込んで来るほどの快さであつた。彼は舟の下を走る

潮騒に耳を澄ました。音は自分の胸から湧き出るほど
自然に聞えた。彼は力の張り切つた自分の腕と股を見
た。幸福が凡てに宿っているように思われた。熱い涙
がさん／＼と彼の眼から流れた。彼は艀を外して大声
に泣き出した。

兄と彼女が空虚な眼を睜つた。舟はやはり沖へ進ん
でいた――

四

――われ爾が冷かにも有らず熱くも有らざることを
爾のわざに由て知れりわれ爾が冷かなるか或は熱から
んことを願う――弟はゆうべ床で読んだ聖書の句を繰
り返えしながら寢着のまゝで裏へ出た。雑草が露の重
味で頭を下げ霧に包まれた太陽の仄白い光りの下に胡
麻の花が開いていた。彼は空を仰ぎ朝の香を胸一杯吸
つた。庭の片隅の野井戸の側に兄が蹲まっていた。弟
の近寄る蹻音を聞くと兄は振返えつて微笑んだ。眼鏡
を外した左の眼が白い貝の肉のように閉じている。

先きを輪にした長い蛙釣りの草が二三本そばに落ち
て居り、兄の手には細い解剖刀がキラ／＼と光ってい

た。兄はそれをブリキ板の上に乗っている大きな蛙の口へ突込んだ。それから両手で手際よくその皮が剥がれ透き通るような肉が取り除かれて清らかな内臓が出て来た。心臓がまだひく／＼動いている。

「どうだ。好いだらう。」

弟は漠然と笑った。

「人間とそう違わないんだぜ。」

「うん。」

二人は暫く黙ってじっとその解剖体を見ていた。それから兄はそれをブリキ板ごと、前の井戸の中へ放り込んだ。胃袋や肝臓や直腸が板を放れてばら／＼に水の中に浮き沈みした。兄は解剖刀を洗って二三度水を切って立ち上った。太陽の光が眩しいほど明かに彼等の上に落ちて来た。

二人は並んで主家の方へ引き返えした。

「聖書なんか読むよりずっと面白いだろう？」

そういつて眇の兄の顔が笑いながら弟の眼を覗き込んだ。

中学を出ると兄は東北のある専門学校へ入った。兄

のたつ日、小さな車に兄の柳行李を積んで弟と歌津子とが町の停車場まで送っていった。汽車が出てしまつてからも彼女はいつまでもあとを見送って立っていた。弟は車の轅を掴んで、その彼女をじっと待っていた。それから彼等は闇い道をてんでに別なことを考えつゝ引き返えした。途中で雨が降って来た。弟は車を道傍に置いて十間ほど後から来る彼女のところへ戻っていった。

「遅れるから忙／＼。」

そう言つて彼は彼女の手をとった。彼女は眼に一杯涙を溜めていた。それが急に唇を震わせて彼を見た。

「車にお乗り。」そして彼は胸を轟かしながら彼女の肩に手をかけた。彼女はもう一度鋭く彼を見詰め、それから不意に彼の胸を押し除けて駆けだした。彼は硬くなつて彼女の後姿を見守った、そして車のところへ戻つて、提灯に火を点け、寂しい車輪の音をひゞかせながら彼女のあとを家に帰った。

五

父が亡くなつて弟があとをやつていくようになった

た。学校を途中で廃して帰って来た兄は、家の庭に研究所を建てて殆ど終日それに籠っていた。兄は歌津子と結婚した。そして幸福であった。

ある日兄は少し興奮して弟を研究所へ引張っていった。^{*}トリキナ病の血精注射の研究に使われる単や鶏の肝臓で何カ月も飼養されてるイモリがガサ／＼と音を立ててる間を抜けて彼等は大きな机の前へ行った。机の上にはアルコオル漬けにした蜘蛛の壘が幾つも並んで居り、その前の硝子器の中にも一匹大きなやつがじっと伏せられている。それがよく見ると、四対ある単眼の七つが、押し潰されて、そこに黒ずんだ粘液が盛り上っているのだ。

弟はそつとそれとその前にある黒眼鏡をかけた兄の蒼白い顔とを見較べた。

「これは盲じゃないんだぜ。」そういつて兄は、アルコオルランプの焰で引き伸ばした細い硝子の棒の先端を蜘蛛の眼のところへ近づけた。蜘蛛は四耗ほどの褐色の剛毛の立っている脚で緩慢に方向を転じた。兄は冷笑した。それから彼の前に並んでいる犠牲者達の歴史を説明した。

彼はまず蜘蛛の雄と雌を捕えた。そしてその毛並みの艶やかな美男の雄の単眼の一つへ硝子の針を刺し通してから、之を花嫁に与えた。一群の子が生れた。拡大鏡で見ると、子は一人一人立派な眼の持ち主だった。子と子が結婚して一群の孫が生れた。孫のうちで一匹怪しいのがいた。それを飼養しておいて今日試験したのである。彼は此の蜘蛛の完全な眼を一つずつ硝子針で潰した。そしてその怪しい単眼一つを残して置いてその視力検査をやったのである。

アルコオル漬けになつてるのは祖父母と子夫妻であつた。

「それでつまり。」と弟が兄の顔を見ながら言った。

兄は少し棘くなりながら、

「つまり俺の子にも眇は生れないってことになるからなあ。」

「お目出たはいつでしたっけ？」

「なあに、まだ／＼だがね。」そして兄は硝子器の中の蜘蛛を窓から外へ抛り出した。

弟は少し憂鬱になつて試験所の外へ出た。彼は兄の幸福などよりは今年納める税金のことの方が大事だと